

第21回
外国人による
日本語スピーチコンテスト

2012年2月18日(土)午後1:00~4:30
ところ/県民文化センター小ホール
主 催/財団法人茨城県国際交流協会
共 催/茨城県

1. 廖 波ラン

『市役所で受けた親切』

皆さん、こんにちは。

私は、2年前に中国から日本に来た廖波ランと申します。

日本の企業に勤めている夫と2人で日立に住んでいます。

実は、日本に来る前、私は日本にあまりよいイメージを持っていませんでした。日本の方と実際に会ったことはなかったのですが、小さいころからお年寄りに日中戦争のことをよく聞かされてきました。ですから、日本人はきっと冷たいだろうと思っていました。

周りの友達の中にも、私が日本に行くことを聞いて、「日本人は厳しいし、怖いよ、気をつけてね」と心配そうに話してくれた人もいました。もし夫が日本に住んでいなければ、私は一生、日本に来ることはなかったかもしれません。

ところが、実際、日本に来てみると、日本人から受ける印象は全く違っていました。私は今でもその日のことをよく覚えています。それは、日本に来たばかりのときでした。私は市役所へ外国人登録に行きました。下手な日本語で、ドキドキしながら、「すみません、外国人登録はどこですか」と案内係の方に尋ねました。すると、係の方はとっても明るい声と笑顔で対応してくださいました。その上、私をわざわざ窓口まで案内してくださったのです。びっくりもしましたが、感動もしました。もし中国であれば、「何番口です」と簡単な答えしか返ってきません。

受付の方もまたすごく優しくかったです。私の名前は廖・波・ランと3つの漢字でできていますが、そのうちの2つの廖とランはパソコンでは簡単に書けないのです。受付の方が入力するのに長い時間かかりました。

登録手続きの途中、受付の方は何回も、「本当に申し訳ございません。もう少しお待ちください。ご迷惑をおかけします」と謝りにこられました。

中国にいたときには、市役所や警察署などに行っても何かを尋ねても、日本のような丁寧な返事はあまり返ってきません。時には、一般の人に対して偉そうな顔をしている公務員もいます。そのころはそれが当たり前だと思っていました。

しかし、日本で生活をし、日本の文化に少しずつ慣れてきた私には、その態度はあまりよくないと思うようになりました。

ここにおられる外国人の皆さんも、私と同じように日本人の親切さはもちろん、勤勉さや正直さ、その他いろいろよい点を体験しておられると思います。

そして、私は、これらのよい点こそ、日本をこのように発展させた原動力の一つだと思っています。

皆さん、これらのよい点を自分の国の方々に伝えませんか。

ところで、もし日本の方で、私のように先入観を持っていて、中国人はだめだと思っておられる方があれば、ぜひ一度中国に行ってほしいです。そして、多くの中国人に会い、

中国の文化などを体験していただきたいと思います。中国に対する考え方が変わるかもしれませんが、いいえ、変わると信じます。

私たちが先頭に立って、国と国との邪魔な垣根を取り払きましょう。歴史は過去のことです。未来こそ大切です。

私は心から日本と中国の友好を、そして、世界中の国々がもっともっと仲良くなることを祈っています。

ご清聴どうもありがとうございました。

2. アデイカリ プルソタム

『コミュニケーションと愛』

皆さん、こんにちは。

皆さんは、子どものころよく遊びましたか。たぶんよく遊んだと思います。

私もよく遊びましたが、友達のほうは、同じ歳ぐらいの友達より年上の友達のほうが好きになりました。どうしてかという、いろいろな経験とか諦めないことを学べるからです。

私は、日本に来て、どうして子どもは子どもだけで遊ぶのか不思議でした。大人は大人だけで、お年寄りはお年寄りだけで遊ぶのか、びっくりしました。

皆さん、相手は何ですかという質問をすると、大人でいろいろな経験をした方にはたくさんの方があると思います。

愛というものは、教室のテーブルで勉強できないもので、頭の中に何かもやもやしたものが自然に生まれることだと思います。それはいろいろな人から学べますが、お年寄りの人から一番自然に学べることだと思います。

これは、私の経験なのですけれども、私の国の軍隊は、いろいろな国を助けるために戦争に行っています。私の祖父も軍人でした。戦争のとき、2人、敵を殺してしまっ、後、心がとっても痛くなって軍隊をやめました。

あるとき、私は、虫を見て、恐くて殺そうと思ったときも、祖父は軍隊のいろいろな経験を私に聞かせて、人とか動物の人生は一回だけだから殺してはいけないよということを教えてくれました。それを聞いた私は、今まで生き物を殺すことができません。

皆さんは、恐そうな人とか障害者と友達になったことがありますか。一部の人もかもしれませんが、私は日本に来て感じたのは、そういう人たちは、避けたりばかにしたりする人が多くないでしょうか。

いろいろな人の考えを聞いてください。知らなかったことに気がつきます。

日本の生活は忙しくて、自分の子どもたちにもいろいろな知識を教える時間がなくて、子どもたちは、愛とか、ほかの人の気持ちをわかることができません。原因は何ですか。いじめです。

日本の子どもたちは子どもだけの世界の中で暮らしていますから、困ったときにはどうすればいいかわかりません。誰にも助けてくださいと言えません。いじめられている子どもの気持ちを考えられません。

いじめが原因で自殺する子どもが多いです。それを聞いてびっくりした私はとても心配しました。もし、みんな子どもが頭の中に愛のイメージがあったとしたらいじめは起こるでしょうか。

ところで、3月11日、大地震の日、その日、私は体育館に避難しました。そこで初めていろいろな人たちと話しました。おばちゃんやおじいちゃんと友達になってとても楽しか

ったので、毎日、体育館に行きました。

おじいちゃんやおばあちゃんは、「こんな大きな地震、俺も初めてだっぺよ」と言いました。私もとってもうれしくて、話したりしました。

あと、私と学校の友達は、市役所からビスケットをもらって、それを食べてお腹いっぱいになりましたから、もう新しいものを食べたいなと思ったとき、おばあちゃんは、「お腹すいたけ」と聞きました。何か新しいものかなと思って、うれしくて「イエース！」と思いました。おばあちゃんはカバンを開けて、食べ物を見せたら、あれ、同じビスケット。がっかりしました。でも、食べてみました。おいしかったです。本当においしかったです。たぶん、おばあちゃんの愛が入っていたからかなと思いました。私のビスケットよりおいしかったです。

地震のとき、大人と、おばあちゃん、おじいちゃんと一緒に話してみることができました。これからも一緒に話をしたり遊んだりしてみたいなと思います。

ありがとうございました。

がんばっぺ、日本。

3. 張 セム

『「褒める言葉はクジラでも躍らせる」ってご存知ですか。』

皆さん、こんにちは。

皆さんは、「褒める言葉はクジラも躍らせる」という言葉をご存知ですか。これは、アメリカの本で、何年か前に韓国語で訳され、とっても話題になった本のタイトルです。話せないクジラでも、褒められたら踊れるということです。

私が日本に来たばかりのときは、日本語であいさつもできない、初級レベルでした。しかし、今は、大学院で日本語で授業を受けるほど日本語ができるようになりました。これは、日本人の友達や先生が私に言ってくれた褒め言葉のおかげだと思います。

実は、そういう褒め言葉を最初に聞いたときは素直に聞けませんでした。それは、自分の日本語が誰かに褒められるほどのレベルではないと思っていたからです。それで、一生懸命頑張って、いつかはすばらしい日本語で褒めてもらいたいと思いました。

しかし、そういう考え方は、昨年、私がひきこもりの経験を持っている人や不登校の子たちに韓国語を教えることによって少し変わるようになりました。

最初は少し先入観を持っていて、すごく緊張し、大丈夫かなと思いました。もしも下手な日本語で傷つけたらどうしようとずっと悩んでいましたが、実際にやってみたら、それは余計な心配でした。

なぜかという、その生徒さんたちは、何か勉強したいと思って勉強するのは初めてだったし、自分自身が成長したいと思っていたから、みんな熱心でした。

その8人が韓国語で「アンニョンハセヨ」とあいさつしてくれると、うれしくていつも私の口からは「すごいですね」という褒め言葉が自然と出ました。

日本のひらがなのような韓国のハングルを一つ一つ丁寧に覚えて、口から出して、一生懸命書いているのを見て、「すばらしい」、「すごい」と一人一人を褒めました。

最初は難しいという人が多かったのですが、だんだん慣れてきて、最初より話せる韓国語の言葉がみんな増えていました。

10回の講座が終わって、みんなから手紙をもらいました。それを読んで、私は心の底から感動し、ありがたい気持ちでいっぱいでした。

その文章の内容は、ほとんど、「セム先生、いつも褒めてくれてありがとうございます。もっと韓国語を勉強したくなりました」ということでした。

その瞬間、私は気づきました。韓国人の私が見て、少しでも韓国語ができる日本人はすばらしいということを。きっと私を見ていた日本人も同じように思っていたのではないのでしょうか。

そして、その講座で一番記憶に残っている学生がいます。その学生は、ものすごく静かだった不登校の女の子でした。その子に話しかけると、いつも目も合わせてくれないし、恥ずかしがっていました。でも、宿題とテストはいつも満点でした。そのときは、必ずみ

んなから拍手してもらい、私は、「〇〇さん、偉いですね」と褒めてあげました。その子はだんだん私と話せるようになり、ときどき素敵な笑顔も見せてくれました。

最後、私に「これから勉強して韓国に留学したい」と言ってくれました。こんな足りない人間の私が、韓国語を教えるようになり、少しでも日本人の学生に私の気持ちが伝わり、私の母国に来たいと言ってくれたのがすごくうれしかったです。

10回という短い時間だったのですが、私にとってはすばらしい経験になっています。

そして、お金や電気は節約しても、褒めることは節約せず、ばんばん言いたいと思います。

皆さんへの私の褒め言葉です。

つたない私のスピーチを最後まで居眠りせず聞いてくださった皆さん、チェゴエヨ！

ありがとうございます。

5. 小宮山 ウェリントン 章

『夢を追いかけて』

皆さん、こんにちは。

皆さんの夢は何ですか。

私たちは、みんな、子どものころ、いつも夢を見ていましたね。それが大人になるにつれ、だんだん夢を諦め、現実目に向けてようになります。

でも、本当に夢を諦めなくてはならないのでしょうか。夢を持ち続けている人もきっといると思います。

私は、常総市にあるブラジル人学校オプションの教師です。私が今こうしていることを2年前の私からは全く想像できませんでした。

どうして私がここにいるのかお話ししたいと思います。

日本に来る前、私はブラジルで大学を卒業して、経済的にも恵まれ、多くの人が望むような生活をしていました。でも、心の中は虚ろでした。

10年前から、私は日系ブラジル人の青少年を支援する活動に参加しています。そして、この活動で得たことをもとにジュニア会というグループを結成しました。

このグループが広く世界に認められるようにと夢見て、夢、友好、団結、規律、愛で世界を変えようという志を持って活動をしていました。

そして、この会はみんなの力で徐々に結果を残していきました。メンバーたちは自分たちに大きな力があることに気づき、自分たちが世の中を変えられるという自信を持つこともできました。

こうして、活動していた彼らの多くは、ブラジルの有名大学の学生となり、次の世代の若者たちを育てる活動を続けています。

私にとって、このジュニア会の大成功は大変うれしいことでした。しかし、私は、まだ満足していない自分があることに気がついていました。それは、たぶん、本当の日本を知らなかったからだと思います。日系三世の私には確実に日本の血が流れているのです。

2年前、ジュニア会の活動により、世界会議に招待され、来日をした折、私の運命を決める出会いがありました。それは、今、私が勤務しているオプションの校長と出会ったことです。

そのとき、日本にいる日系ブラジル人の子どもたちの様子を知ることになり、彼らとともに活動していきたいと強く思いました。

日本でジュニア会をつくり、彼らを支援することが自分の使命だと思いました。

そして、私の人生は大きく変わりました。それまでの快適な生活をすべて捨てて、夢を実現することを選びました。

去年の大震災1週間前に来日、そこから私の夢は始まったのです。

初めてオプションへ行ったとき、そこには何の夢もなく、毎日だらだら過ごす中高生が

いました。私は絶対に日本に来てジュニア会をつくろうと再確認したのです。

今、私はとても幸せで、充実した毎日を送っています。日本でジュニア会を軌道に乗せることはまだまだ遠い道のりかもしれません。でも、大切なことは、結果だけではなく、それを実現するための経験や努力だと思います。それらが必ず日系ブラジル人だけでなく、ほかの人の幸せにもつながっていくに違いありません。

というわけで、今、私はここにいます。

私は日系ブラジル人の青少年、そして、彼らを支えるすべての人たちの幸せのために頑張っていきたいと思っています。

私はこの日本でまだまだ大きな夢を追いかけていきたいと思っています。

どうもありがとうございました。

6. 裴麗瑩

『豊かさ、親しさ、成長している魂』

皆さん、こんにちは。

国際理解を深める内容というテーマを見て、実際、留学先の日本への印象について考えるようになりました。

浮かんできたイメージが数えられないほど多くて、本当にどこから話したらいいのかわからなくなりました。

私は、2009年9月、筑波大学大学院の研究生として日本に来ました。

新しい生活の始まりは、期待七分、不安三分でした。

日本に来て、最初に感じたのは豊かさでした。豊かさといえば、日本はアジアの経済大国で、世界が誇る先端技術を持つ国です。

その象徴として、東京新宿に、天に突き刺さるような高層ビル、そして、迷路のような自動車道路、蜂のように働く人々などです。

中国ではゆっくりしていたので、一緒にやれるか心配でした。

私の研究先はつくば市にあります。つくば市は、東京と比べ、自然が豊かで美しく、静かで気持ちが休まり、落ち着いて勉強できる環境でした。

秋の紅葉、冬の雪、春の花、夏の緑、本当に自然に恵まれた都市で、研究に取り組むのに非常に適した都市だと感じました。

大学の宿舍ごとにある粗大ごみ置き場は本当に留学生にとっては宝の山です。まだまだ使える冷蔵庫、テレビ、パソコン、電子レンジなど、まだまだきれいで、新しく購入しなくても最低限の生活ができることは私をびっくりさせました。

私は、このつくば市で生活の心配がないので、これから頭の中を知識で豊かにするぞと心の中で叫びました。

次に、初めて日本の先生と会ったとき親しみを感じました。中国で面接を受けたときもすごく優しくそうに見えましたが、日本に来たらもっと心温かくしてもらい、生活から勉強まで全部面倒を見てくださいました。

研究室の秘書さんも、先輩たちも、みんな優しくしてくださって、本当に大きい家族の中にいるようです。最初に抱いた三分の不安も、いつの間にか消えていました。

実は、私が研究している研究テーマにも親しみを感じています。私は、高齢者のケアの研究のため日本に来ています。毎週、先生とY町へ行き、高齢者の介護予防教室のお手伝いをしており、また、看護助手として附属病院の脳外科病棟で患者さんのお世話をしており、ほぼ毎日、日本の高齢者と会う機会があります。

私のほうから笑顔で話しかけていくと、高齢者のほうも笑顔でいろいろな話をしてくださって、本当に毎日が楽しくてたまりません。

中の方は外の方を家族のように迎え入れ、外の方は中に入って気持ちよく休めるという

ことを体験できる国だと言っても過言ではありません。

自分の国にいるように、どこでも自分の考え、自分の思いを素直に話すことができ、本当に異国に住んでいることを忘れるようです。

ある先生のゼミに参加したときでした。非常に印象に残った言葉は、自分がやりたいことに100%の心をかけていくと、その人間の魂は成長していくという言葉でした。信頼される人になりたいという言葉は、今の私の頭の中でこだましています。時間に厳しい人になろう、引き受けたことは責任を持って100%の心かける人になりたいなどのように、日本、このつくば市で今まで習ったことは私の人生をもっと輝く道に導いて、私の魂を成長させてくれると信じています。

たった2年の日本での生活ですが、最初に抱いた七分の期待が十分となり、収穫は抱負です。

きょうも私は、先生、先輩、患者さんにも優しい笑顔で話しかけ、夢を実現させるため、魂を成長させるよう、一生懸命走っていきます。

そんな今の私の夢を実現させてくれるところが日本です。

ご清聴ありがとうございました。

7. アレックス ハー

『日本と言う国』

皆さん、こんにちは。

皆さん、外国へ行ったことがありますか。

行く前のイメージと行った後はどう変わりましたか。

きょう、私は日本に来る前のイメージと、もうすぐ帰国するときを感じていることについてお話ししたいと思います。

私の幼いころ、日本は侍や忍者が住んでいるというものでした。忍者たちは、弱い者や困ったときに助ける正義の味方です。現代風に言えばスーパーマンです。スーパーマンになるのは男の子にとって誰でも持つ夢だと思います。

私は、スーパーマンに憧れ、毎日、お父さんに「刀をつくってくれ」と長い間せがんだ挙げ句、木刀をつくってもらいました。それで、毎日毎日遊んで、7歳のころ、7歳の忍者と呼ばれました。

高校生ぐらいになると、その夢は、日本に行ってお花見をしたりして、日本人は、実際どのように生活しているのか知りたいという夢に変わりました。

大学時代に工学部で学びました。今度は、日本で直接、現場で学びたいと思います。

卒業と同時に技術実習員に応募しました。そして、いよいよ日本に来る夢が実現したのでした。

夢は人が生きていく上、とても大切だと思います。言うならば、夢は私たちを成長させてくれるものです。

日本というと、すぐ京都が頭の中に浮かびます。京都の言葉はなんだかやわらかくて、とても美しい印象を受けました。しかしながら、私の勤めている常陸太田市の人たちは茨城弁を話しています。最初に来たとき、言葉が強くて恐い感じを受けました。でも今は、「だっぺ」、「すっぺ」など心地よく、とても親しみを感じています。

ところで、なんととっても一番びっくりしたのは、去年の3月11日に発生した地震のことでした。本当に恐ろしいものでした。

私は地震訓練を行っていましたが、まさかそんなに大きくなるとは思いませんでした。地震直後、私はパニックになって、でも、周りの人のおかげで冷静になって、数日、協力をして過ごしました。

その地震から、私は、日本人についての考えが変わりました。肝っ玉が据わりました。

それで、地震で倒れた家の片付けなどのボランティア活動を行っていました。

地震が発生した2～3週間、ベトナムの家族から電話があり、日本にいてスーパーマンになったと褒めてくれました。私の子ども時代の夢を覚えていてくれて本当にうれしかったです。

もうすぐ技術実習が終了し、帰国することになります。この2年間半はしっかり技術を

学びました。でも、もっと大切なことも学びました。それは日本人の生き方です。

もし、日本はどんな国ですかと聞かれたら、私はこう答えます。肝っ玉据わっていて、お互いさまという心を持った人がいる国だと答えたいと思います。

最後、このたび発生した東日本大震災により被害を受けられた皆様、ご家族の皆様に対して心よりお見舞い申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。

8. メリッサ メイヤー

『コンビニが語るニッポン』

「いらっしゃいませ」と初めて言われたとき、どう答えたらいいか戸惑いました。ほかの日本人のお客さんからヒントを得ようとしたら、日本人は「いらっしゃいませ」というあいさつに答えられないものだと気づきました。

日本で、お客さんがレジまで品物を持ってきたとき、店員さんはわざわざ走ってくる上に、「お待たせいたしました」とお詫びまでします。さらに、お金を預けるときも、お客さんが帰るときも、店員さんが言葉をかけることが多いです。

しかし、ほとんどのお客さんは、最初から最後まで無言です。

アメリカ人の私は、日本に来て、このようなサービスに慣れていませんでしたので、店員さんの言葉にも、それに対してお客さんの無言にもとても驚きました。

せつかく歓迎をしてもらっているから、「いらっしゃいませ」と言われると、何だか答えたい気持ちになります。しかし、目立たないように、日本人を真似して何も言わないようになってしまっています。

この間、アメリカに帰ったとき、コンビニでレジまで品物を持っていきましたが、店員さんがしばらくの間私を無視しました。その店員さんがやっと私に対応してくれたとき、「お待たせいたしました」と言うどころか、失礼な態度で精算額しか言いませんでした。日本の顧客サービスに慣れていた私はとてもイライラして黙って帰りました。

そのとき、日本での体験がなければ、どのように反応していたかがとても気になりました。もっとアメリカ人らしく、「おい、早く精算してくれよ」とはっきり言えたかもしれせん。

もしかしたら、その店員さんの対応がごく普通で、なんとも思わなかったかもしれせん。

アメリカにはチップ制度がありますが、チップをしないサービス業、例えば、小売店やコンビニには特にいいサービスを期待できません。しかし、チップをするところでさえ日本のすばらしいサービスとは比べものになりません。

私は日本のガソリンスタンドのサービスにも感動したことがあります。店員さんが同じ制服をして、生き生きした行動でガスを入れたり、窓ガラスを拭いたり、動き回っていました。最後に道路まで案内して、安全を確認して見送ってくれました。

私がとても温かい気持ちになって感激をしていましたが、一方で、一緒にいた日本人の友達も、「それは普通だろう」と無感動でした。

アメリカのガソリンスタンドで店員さんにガスを入れてもらうときはチップを払わないといけません。また、店員さんが窓を拭こうとしたら、チップをさらに払いたくないお客さんは、「いやいや、きれいにしないでよ」と車の外にいる店員さんが聞こえるように大きい声で断ります。

アメリカは日本みたいに統一されたサービス基準がないため、アメリカ人のお客さんは、このように自分の都合に合うサービスをはっきり求めないといけません。

私が日本にいる間、サービスを求める声ではなくて、サービスを認める声を使ってみてください。

例えば、「いらっしゃいませ」に「こんにちは」と答え、「お待たせいたしました」に「いいえ」と答え、「またお越しく下さいませ」に「はい、また来ます」と純粋な感謝の気持ちで答えてあげたいです。

変な外人だと思われるかもしれませんが、外国人だからこそ日本の素晴らしいサービスに気づくことができます。

最後までお聞きになりましてありがとうございました。

9. マスナワティ

『介護福祉士をめざして』

皆さん、こんにちは。

日本に来てもう2年になりました。わからないことがまだたくさんあるからこそ面白いと思います。

現在、ありすの杜という身体障害者の施設で働きながら、国家試験合格を目指して勉強しています。

平成20年から、インドネシアの看護師・介護福祉士候補者が日本に来て仕事をするのが始まりました。今まで第4期生までできました。私は、平成21年の第2期生です。

インドネシアでは、看護師をしていました。今は、日本に来て、介護福祉士候補者として働いています。

インドネシアでは介護という仕事がありません。介護の勉強をするところもありません。私は介護の勉強をするために日本に来ました。

私は、初めて日本に来たとき、日本語があまりわかりませんでした。今でもまだわかりませんから、日本語を勉強しています。日本語の先生と施設の担当者が教えてくれます。

日本に来てから、国家試験を受けるまで、3年間の中でいろいろなことを覚えなければなりません。日本語だけではなく、介護の言葉も覚えなければなりません。日本人でも難しいと言っているのです。私にとってはもっと難しいかなと感じました。

一方、仕事もとても大事ですので、自分の生活や健康管理などに気をつけなければなりません。

利用者さんと話しているとき、私は時々理解できないことがあります。そのときは利用者さんがいつも教えてくれます。あれ、私は介護する人ですか、介護される人ですかと考えます。

利用者さんは、障害を持っているのに、できるだけ自分の力で自分でやっています。笑顔でいつも楽しく生活を続けていると感じます。本当にいろいろなことが勉強になります。

私の仕事は、利用者さんの食事やお風呂や排泄などの介護をすることです。みんなのおかげで仕事に慣れてきました。

皆さん、福祉施設をどう思いますか。私はこう思います。介護は、高齢者や障害者などが自分の希望する生活ができるように、日常生活全体を世話するということがわかってきました。

仕事には大体慣れてきましたが、日本語がまだ上手になりません。利用者さんの記録やケアプランなどを早く理解したいです。

去年の3月11日、大きい地震がありました。恐かったです。

でも、施設で防災訓練を毎月やっていました。利用者さんはきちんと避難することができました。私は安心しました。

3日間ぐらい施設に泊りました。その後、また大きい地震が来るかもしれないとよく聞きました。私は心配になって、国に帰りたいと思うこともありました。

来年1月の国家試験を受けることは心配ですが、合格を目指して、利用者さんの笑顔も見られるように一生懸命頑張ろうと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

10. クリストファー エンジェル

『朝飯前』

きょうの朝ごはんは何を食べましたか。和食でしたか。洋食でしたか。納豆、それともトーストが好きですか。

日本に住む外国人は、自分のお気に入りの朝食が手に入らないので大変です。朝早く起きて、子どもたちに朝食をつくってあげることは、私の家の大事な伝統です。日本に引越しても続けていきたいと思っていました。

でも、アメリカで毎日食べていた朝ごはんは日本では高すぎることにすぐ気づきました。ある日、和風の朝ごはんをつくってみました。練習すれば朝飯前にできました。

日本に来る前には、子どもたちと一緒に起きて朝ごはんをつくっていました。簡単でした。毎日、チリオスを開けて、1歳の娘とわちゃんに、テーブルの上においてあげて、2歳の息子れんちゃんにはチリオスとミルクをボールに注いであげました。れんととわは今でもチリオスが大好きですが、日本に来たらチリオスがなくなっちゃった。

日本に来て、まず、洋風の朝ごはんをつくってみました。ソーセージとスクランブルエッグとトースト。でも、それらが家になれば何もつくれなかったです。

妻が朝ごはんをつくるたびに、たいてい、味噌汁と卵焼きと納豆ご飯をつくっておくのを見ました。子どもたちがそんな朝ごはんも好きのなら、私も和風の朝ごはんをつくってみようと思いました。朝飯前でしょう。

初めは、洋食の朝ごはんをつくろうと始めたのに、和風にすることにしました。スクランブルエッグをやめて卵焼きに変えました。もうミルクと塩コショウをいれてしまったから、そのままつくってみました。妻が出汁を入れていたのを思い出して、私も急いで出汁を入れました。フライパンでくるくると巻いて焼きました。巻きにくかったからきれいじゃなかったです。

次に、味噌汁をつくりました。タマネギと豆腐をお鍋に入れて、煮て、火を切って、味噌を入れて混ぜました。でも、出汁を入れるのを忘れてしまいました。

納豆ご飯も準備しておきました。

初めてつくった和風朝ごはんの結末はこうでした。味噌汁に出汁を入れるのを忘れたので、味噌汁は不評でした。卵焼きはみんな大好きでした。子どもたちがぺろりと食べてしまいました。妻も上手にできたと褒めてくれましたが、ミルクが入っていると云ったら、すぐ気が変わりました。

完璧な朝ごはんではなかったけど、家族が喜んでくれたのでよかったです。

お父さんの皆さん、今度、奥さんが遅くまで寝ていたら、朝ごはんをつくったらいいと思います。子どもと奥さんが笑って感動するかもしれないです。練習すれば朝飯前になるでしょう。

そして、卵焼きにミルクを入れるのが私のお勧めです。やってみてね。

ありがとうございました。

11. 郭 ショウ楠

『親切の力』

こんにちは。

私は、生まれてから中学卒業まで中国で育ちました。両親の仕事の関係で、2008年6月に日本に来たときは日本語が全くわかりませんでした。でも、その9カ月後、私は高校の入学試験に合格し、3月には無事卒業します。

きょうは、この3年間半の間、私を支えてくれた親切の力について話そうと思います。

日本に来たとき、私は、これから新しい幸せな生活を送るのだと信じていました。けれども、一旦、生活を始めてみると、多くの困難が待ち受けていました。

来日したのは6月で、入学するには遅すぎました。通うべき学校がなかったので、私には行くところも一緒におしゃべりをする友達もいませんでした。

日本に来てしばらくは、毎日、北茨城の海岸に行き、日本に来たことを後悔しながら泣きました。気分が落ち込んで、家族とさえも話さなくなりました。

でも、その一方で、心の底では気がついていました。私は日本語を学ぼうと決心し、北茨城の日本語教室に通うことにしました。

授業に出てみると、先生方は皆親切で、日本語だけではなく、日本の習慣や礼儀も教えてくださいました。

先生方が全員ボランティアだということを知ったときは、私は強く心を動かされました。

母は、「もし何か困ったことがあったときは、日本語の先生にお願いすればきっと助けになってくれるからね」と言いました。実際、先生たちは、日本語をはるかに超えて私をサポートしてくださいました。

日本の中学に通ったことがなく、どの高校を志望すればよいかわからなくなって困っていたとき、一人の先生が、ご自分が卒業された高校をとってもよい学校だからといって勧めてくださいました。ほかの二人の先生は受験のための英語と国語を教えてくださいました。

そして、2009年の春、私は日立第二高等学校英語科に入学することができました。

入学後、私にはたくさんの友達ができました。寂しさを感じる余裕がないほど学校での生活はとても楽しく、忙しく、毎日が充実していました。

そんなとき、東日本大震災が起きたのです。震災の日、私は改めて、ほかの人のために何かすることの大切さと親切の精神を学ぶことになりました。

日本語の先生が、私の家族のために水や食べ物を持ってきてくださったのです。先生が、大勢の人たちが命を失っている中で、生き残った私たちはどんなに幸せかということをお話してくださいました。そのことは私に震災から立ち上がる勇気を与えてくれました。

震災のことを知った中国の友人は心配して、「お願いだから中国に帰ってきて」と言いました。でも、自分の中では答えが出ていました。私は「帰らない」と言いました。私は日

本に残って、私を応援してくれた日本人たちの力になりたいと強く思ったからです。

地震の翌日、私は北茨城の海岸に行って、被害を受けた家々の片付けを手伝いました。手伝いながら、ほかの人のために何ができるかを考えました。

現在、私は、中国語、英語、日本語を話せます。私の目標は日本のホテルで働くことです。語学力と日本語の先生方から学んだ親切の心を生かし、世界中の人たちと来日した中国人と日本人との交流の架け橋になりたいと思います。

そして、幸せな人生を送るのに必要な希望と自信をたくさんの人に持ってもらえるように努力していきたいです。尊敬する日本人の先生が私にしてくださったと同じように。

ありがとうございました。

12. ジョン フレデリック モートン

『日本でベジタリアンであること』

「たこ焼きをたこなしでお願いします」、「えっ、何？ どういうこと？」、驚きの声が上がりました。

皆さんは、なぜ私がこんな注文をしたのかおわかりになりますか。

私はベジタリアンです。つまり、菜食主義者です。

ベジタリアンって聞いたことがありますか。

なぜ、どうしてベジタリアンになったのですかとよく聞かれます。実は、何年も前に肉を食べたことがあり、おいしかったです。私の場合、ベジタリアンである理由は味とはあまり関係ないことです。私の家族はみんなベジタリアンです。肉や魚を一切食べないで育ちました。ですから、肉や魚を食べないことのほうが自然で、小さなときからの習慣なのです。

ベジタリアンであるために、時には不便なことがあります。

私は日本の中学校に勤めていますが、学校の給食を食べられません。ですから、そのかわりにお弁当を用意しています。

日本で手に入る食材を使って、新しいメニューを試しています。

皆さんと同じように私も旬のものが大好きです。また、日本食の作り方をインターネットで検索し、学校の先生にも相談しています。その結果、稲荷寿司や出汁巻き卵などができるようになりました。ですから、ベジタリアンであることの不便さは、同時に、新しい発見にもなりました。

ベジタリアンはヘルシーなイメージがありますね。しかし、私は何よりも甘いものが大好きです。もしケーキの山がここにあって食べ続ける自信があります。そのため、去年の健康診断の結果はあまりよくなくて、ケーキを食べ過ぎないように言われました。

失敗したこともあります。5年前、名古屋大学に1年間留学したとき、大学の先生たちと一緒に焼き鳥屋へ行きました。すると、何も食べられないとわかり、どうしたらいいか困りました。そこで、食べるかわりにビールをたくさん飲み続けることにしました。そうすれば誰も気がつかないと思いました。でも、非常に酔っ払ってしまいました。

しかし、今では、レストランでの注文の仕方はうまくできるようになりました。学校の先生たちとの宴会では、先生たちが特別の予約をしてくれます。ありがたいです。

食べ物は文化の重要な一部です。特に、日本では、食べ物と日本文化とが深く結びついていると思います。

日本では「同じ釜の飯を食う」という諺があるそうです。人々が一緒に集まって同じ体験をする、同じ食べ物を食べてもっと親しくなるという意味なのですね。

時々、ベジタリアンであることによって、私は同じ釜の飯を食べていない気がします。でも、幸せなことに、周りのみんなが助けてくれて、理解してくれます。

これは食べ物のことに限らないと思います。お互いが文化の違いを超えて理解し合うために、何よりも大切なのは、その違いを受け入れることです。

ベジタリアンであることで私はお互いを理解するための鍵を見つけたと思います。

世界中にはたくさんの文化の違いがあります。私たちは、お互いを理解するために、少し我慢したり、相手の文化や習慣を大切にしたりすることが必要だと思います。

私も、これから、日本で見つけた鍵を使って、文化の違いを乗り越えていきたいと思えます。

以上です。ありがとうございます。

13. リュー ガー クイン

『竿』

「竿や～竿だけ～」初めて日本に来たとき、大学の寄宿舎からその響きを聞いて、日本にも行商人がいることを知りました。

高度経済発展国として有名な日本には、スーパーやコンビニなどが溢れています。品物の数も種類も豊富で、わざわざ買い物に出かけなくても、家にいながらでも通販で買い物ができます。生活はそのおかげで快適で便利です。日本なら、欲しいもの何でも、どこでも、いつでも、すぐ手に入れられると感じました。

一方、母国のベトナムは、コンビニでもスーパーでもなく、朝から営業をして、昼ごろに終わるような市場や個人の店か路上の売店が一般的です。品物の数も種類も日本に比べると少なく、便利な通販などありません。

しかし、ベトナム人にとって、行商人は当たり前のように生活に溶け込んだ必要な存在であることです。日本にいる私には、品物がきれいに並んで、クーラーが効いた、涼しく清潔なスーパーマーケットの中で、流れているクラシックか最新曲を聴いてゆっくりと買い物をしたほうが良いと感じました。

ベトナムの行商人は、自分の家の前を大声をあげながら売りに来るので、正直、うるさいと思ったこともありました。だから、ベトナムに帰っても、わざと市場に行かなかったり、行商人は家の前を通るときに、いつか行商人もスーパーに変われば良いのになと思ったこともありました。

静かな日本に2年目、二度目の竿屋さんの声を耳にしました。遠くから聞こえてくるその声は、肩が寄り添うようにぎっしりと立ち並ぶ高層ビルに挟まれた細い道を通り抜け、祭が終わった後のような静かな雰囲気を一瞬壊しました。

そのとき、私の頭の中では、ベトナムの伝統的なノンという三角帽子を被って自転車を必死にこぎながら「ai chieuday」、スゲマットのことを呼び売る声や、小さな肩には果物いっぱいのかごを天秤棒で担いでいる姿を思わず懐かしく思い出されました。

うるさいと思ったあの声ももっと聞きたくなりました。あの声、あの姿は、私の中ではただものを売りにくる人たちだけではなく、特別な存在だったことに気づきました。

放課後、友達と一緒に行商人のように大声で呼び売って歩いたり、家の前にある木陰で一休みしている行商人たちと近所のおばちゃんたちの雑談が賑やかだったときの記憶もよみがえされました。それぞれの声は特徴があって、遠くから聞こえてくるだけでどんな行商人なのかわかってしまいます。

豆腐屋さんは、いつも男性の高い声、アイス屋さんは、必ずクラクションをプップッと押し続けました。

ベトナムは、現在、高度経済成長時期だと言われています。田んぼだったところに立派な工場やスーパーがあちこちに建てられて、市場の数も減って、少し見ないうちに街並み

が変化しています。行商人から買う人も、行商する人も少なく、現在では行商人の姿もあまり見かけず、声もあまり聞かなくなりました。

あの声、あの姿は私の子ども時代とともに生きていました。ベトナムもきっと近い将来、日本のように便利になって、ものをすぐ手に入れたら、行商人の存在も消えていくのだろうと思うと、まるで子ども時代の記憶にある部分を失ってしまったように悲しくなりました。

日本で竿屋さんの呼び売る声を聞いて、初めて、ベトナムも、今、時代が流れてどんどん変わっていくことを実感しました。

品物が多くなって、生活が便利になることはとてもいいことですけれども、もう二度と手に入れられない楽しみ、人とのつながりを失ったことを、なぜか寂しく、むなしい気持ちでした。

ご清聴ありがとうございました。

14. ウィダナラゲ イマニウパラ ダヤスリヤ

『いまわたしはしあわせおかあさんです』

皆さん、こんにちは。

今、私はしあわせおかあさんです。

私はスリランカ人です。家族と一緒に日本に住んでいます。日本に来て今年で6年目です。

日本に来たばかりのころは、日本の言葉も日本のことも何も知らなくて、とっても不安でした。父も母も誰もいなくて、とっても寂しかったです。

最初のころは早くスリランカに帰りたいと思っていました。帰るとき、家族と一緒に帰ることができないので我慢しました。

日本に来たとき、とっても寒かったです。初めて雪が降るのを見たときは、すごく楽しくて、子どもと一緒にゆっくり遊びました。私の国は、一年中暑いので、寒くても雪は降りません。

日本には2人の子どもと一緒に来ました。日本でもう1人生まれたので、ももかと名づけました。この子は今3歳です。

上の2人は学校に入って、日本語を覚え、勉強も慣れてきました。

私も仕事に行きました。

言葉はしゃべれるようになったけど、字は難しかったです。全然わからなかったので、日本語教室で勉強を始めました。

日本にいてすごく怖いことがありました。去年の3月11日、私は初めて大きな地震を経験しました。あのときは、すぐに子どもと一緒に外に出ました。そして、近所の一人で歩けないおばさんやおじさんを外に出しました。

私の家ではガラスやコップが割れて、部屋の中はめっちゃめっちゃでした。電気も来なくてすごく寒かったです。お店はものがなくて、3日ぐらい食べるものが大変でした。ろうそくも一つもなくて困りました。

みんなが、「津波、見た？」と聞いたけど、テレビが映らなくて何もわかりませんでした。

私の国でも、2004年、大きい津波がありました。あのときは4万5,000人ぐらい死にました。日本人も死にました。

私は、そのとき、初めて津波という言葉を知りました。

津波があった2日目に、放射線が危ないと外国人が帰り始めました。私の父や母も「恐いから早く帰ってきて」と何回も言いました。私の周りのみんなも帰りました。

でも、私の考えは違いました。私は、家族と一緒に日本に住んで、日本で働いて、お金をもらいます。今、大変なときに、困っている人を助けなくてどうして帰ることができるのか。帰るのではなく、困っている人たちを手伝おうと考えました。

子どもがいるので放射線は心配でした。でも、頑張っって日本にいて手伝おうと思いまし

た。

スリランカでも津波があったとき、日本からすごく助けてもらいました。そのとき、日本は間違いなくよい国だと思いました。

そして、宮城県気仙沼が大変だとわかりました。私の寺のお坊様、そして仲間と一緒に、みんなに渡すものを持って気仙沼に行きました。坂東市を夕方5時に出て、気仙沼には朝4時に着きました。急いでご飯をつくり始め、4,000人分つくりました。スリランカのカレーを始めて食べて、みんな美味しいと喜んでくれました。とってもうれしかったです。

その後で、洋服、お米、子どもものなどを渡しました。

全部終わってから、津波の場所に行きました。私は涙が止まりませんでした。

気仙沼には3回行きました。津波の場所、今でも忘れません。

私は、今、近くにいるおばさんやおじさんを手伝っています。

日本にいてよかったと思います。

子どもは勉強も部活も、今ちゃんとやっています。

今、私はしあわせおかあさんです。

ありがとうございました。

15. アリブ ムタルバン

『今も生きる 2000 年前の知恵』

皆様、こんにちは。

最後になりましたが、リフレッシュして聞いてください。

私たちタミール人の間では、2000 年前に考えられた 1,330 もの教えが今も大切に伝えられています。ティルクラルと呼ばれます。

今は本になっていますが、当時はもちろん紙はなく、ココナツの葉っぱに書かれていました。リズムカルな詩、ポエムの形です。

タミール人は、これを小学生から高校生まで少しずつ勉強していきます。

大人になり、社会人になった私も、折に触れ、この本を取り出して、私の体験と照らし合わせます。そして、なるほど、わかる、そのとおりでと、ティルクラルをいつも身近なものに感じるようになりました。

ティルクラルの教えから 3 つの教えを私の体験を交えてご紹介します。

その一つは、小さな出会いでも、その機会を逃さず、うまく捉えれば、世界より大きな実を結ぶというものです。

今日の私があるのは 6 円の新聞のおかげです。日本に来る前、就職を考えていたときです。友達が求人情報が載った新聞を買ってくれました。見ると、「これだ」と私の心に響く求人がありました。ある日本の会社です。早速この求人に応募し、就職を決めることができました。

多くの求人情報の中から日本の会社の求人を目をとめたこと、そして、時を逃さず行動に移したこと、すべて事がうまく運び、チャンスをものにすることができました。

友達が軽い気持ちで買ってくれた新聞が、その後の私の人生を大きく左右することになったのです。

2 つ目は、火傷は治すことはできるが、言葉で受けた傷は消せないというものです。

日本にも似たような諺がありますね。口は禍のもとです。

私は、高校生のとき、卒業試験に落第してしまいました。親戚の者から、「アリブはもう終わりだ。大学には行けないだろう」と言われました。ひどいと思いました。傷つきました。もしそのとき、頑張れという励ましの言葉があつたら、今ももっともっと頑張れて、有名人になっていたかもしれない。その古傷は今も時々疼きます。できるなら、人にはやる気が出るような言葉をかけたいですね。口は幸福のもととなるように。

3 つ目は、嘘は使い方によってはいいことだというものです。そうです、日本の諺「嘘も方便」と同じです。

インドの結婚は日本と違って見合い結婚が普通です。見合いの前、相手にこちらの様子を知らせますが、給料が多いです、働き者です、優しいです、偉くなります、家がありますといいことばかり並べて相手を安心させます。日本では、嘘をつくと閻魔様に舌を抜

かれるそうですが、インドでは少しぐらい嘘があってもいいのです。ほかの人に問題なければ。

実は、私の場合もその手を使いました。結婚した後で、その嘘を目指して頑張ればその嘘は許されます。「嘘から出た誠」という諺もありますね。

終わりよければすべてよしです。

ご紹介したものはほんの一例ですが、経験を重ねるほど、2000年前の言葉に現実を見る深い知恵を感じるようになりました。これからも、よき師、よき友として、ティルクラルをいつもそばに置いておこうと思います。

ご清聴ありがとうございました。